



「子育て支援」について考える

関西学院大学法学部 教授 原田 賢一郎

内閣府の子ども・若者育成支援推進本部が2021年4月6日に決定した「子供・若者育成支援推進大綱」によれば、家庭をめぐって児童虐待・貧困・ひきこもり・ヤングケアラー等が社会問題化しているとされ、コロナ禍は、外出自粛等により閉塞感や不安感を高め、配偶者間の暴力や児童虐待等の増加・深刻化が懸念されるなど、子ども・若者はもとより、保護者を含め家庭、とりわけ困難な問題を抱える家庭に大きな影響を与えたとされている。そしてこの大綱は、「全ての子供・若者が自らの居場所を得て、成長・活躍できる社会を目指して」を副題に掲げ、困難を有する子ども・若者が、速やかに困難な状態から脱し、あるいは困難な状況を軽減・コントロールしつつ成長・活躍していけるよう、家族を含め、誰一人取り残さず、かつ、非常時でも途切れることなく支援することなどを基本的な方針としている。一方、このような国の動向をまっまでもなく、「地域の子ども・若者は地域で育てる」といった観点から、困難を有する子ども・若者やその家族への支援など全国各地で様々な取組が行われている。

そうした取組の中でも、生活保護を受けている家庭が多く、ひとり親家庭や障害者手帳をもつ親子、父親の異なるきょうだいが多数同居する家庭も珍しくないといったように、貧困や成育歴、家庭構造によって多くの子どもたちが困難な状況に置かれている大阪市西成区北部に



『子どもたちがつくる町—大阪・西成の子育て支援』
村上靖彦／著
世界思想社

における子育て支援を取り上げたのが、『子どもたちがつくる町—大阪・西成の子育て支援』（村上靖彦／著、世界思想社、2,750円）である。

本書の著者は、上記のような困難な状況にあるにもかかわらず、西成区の児童虐待相談件数が、決して少なくはないものの、日本全国や大阪市

での増加傾向とは異なり、過去10年間変化していないことに着目した。そして、そのことがもつ意味として、確かに虐待はあるものの、西成北部では貧困と地域の熱心な支援者の働きもあって可視化されやすいため、10年以上前から統計に上がっており、増えることがないのではないかと、この地域は社会が真剣に取り組むべき困窮を抱えているにもかかわらず、住みやすいコミュニティが成立していることをこの統計は示しているのではないかとという仮説を立てている。その上で、「逆境を反転して自分の人生をつくることを可能にするコミュニティがどのように生まれるのか」を西成の子育て支援の具体的な姿を描きながら考えるべく、個性的な5人の支援者に対して丹念にインタビュー調査を行っている。さらに、この地域に3つある要保護児童対策地域協議会の実務者会議の1つに参加し、月に1回、児童相談所を含む市・区の担当者、小中学校の生活指導の教員、民間やNPOも含めた地域の各施設で毎日子どもに触れている支援者などが一堂に会して、100件ほどの家庭の全てのメンバーについて、情報をもつ支援者が全て発言し共有していく仕組みをもっていることを観察している。その結果、西成の子育て支援は、子ども中心に生成し変化していく動的な居場所と、すき間を取り残さないアウトリーチ（訪問支援）が組み合わせられたものであり、その中で個性的な複数のグループが連携しながら1つのコミュニティを形成していることを確認している。

このような西成の子育て支援に対して、著者が紹介しているように「すばらしいと思うけど、そんなことはうちの地域ではできない」などと言うことは簡単である。しかしながら、一人ひとりの子どもから出発し、誰一人として取り残されない社会をつくるという普遍的な観点に立つのであれば、本書に学ぶことは多いのではないかとと思われる。